イザベラ・バードに会った３人のクリスチャン学生と弘前教会・東奥義塾の活動

高　畑　美代子

要旨：

1878年、蝦夷地への途上、青森県黒石に逗留していた英国人旅行家イザベラ・バードのもとへ３人のクリスチャンの学生が訪ねてきた。彼らは、弘前にある東奥義塾の学生であり、同時に弘前美以教会（メソジスト）のメンバーでもあった。彼女の日本旅行を記した1880年（初版）の*Unbeaten Tracks in Japan*には彼ら３人の名前はその姓が示されていたが、1885年の普及版ではその部分は削除された。普及版を翻訳した高梨健吉による『日本奥地紀行』では、彼らが誰かということはわからなかった。本稿ではその３人の同定を試みた。

1874年に東奥義塾の外国人教師でメソジスト宣教師であるイングと横浜公会所属の塾頭本多庸一の指導のもとに受洗した学生たちは超宗派の弘前公会を設立した。メンバーはそのほとんどが東奥義塾の学生であり、同時に教師も兼ねていた。バードに会いに来た３人を含め、クリスチャンとなった学生たちはステューデント・ヘルパーとして、弘前近郊や黒石まで伝道のために歩いていた。彼らの活動が原動力となり、東奥義塾と弘前教会が相互作用を受けながら組織を形成していく過程を考察した。

1876年になって超宗派の理想を掲げる横浜公会のもとにあった弘前公会に、宗派所属問題が持ち上がり、複数の宗派からの活発な応援があった。同年12月には弘前公会は所属を決定して、弘前美以教会（メソジスト）として活動をはじめた。当時の宗派所属問題はひとり弘前教会の問題というより、日本で超宗派で宣教をしてきたプロテスタント教会の転機を意味していた。

このような状況を鑑みて、バードが黒石で３人の学生たちから彼らの師に会いに弘前に来るようにと勧められたが、弘前に足をのばすことはなかったと言う事実は、彼女の旅行における宣教組織との関わり方と伝道に対する彼女自身の見方を解明する上で考察に値するものと思われる。

青森県の教育、政治、文化と切り結んだクリスチャン学生たちは、やがて、東京での青山学院の創立や日本におけるキリスト教の発展に関わっていったが､その中にはバードに会った３人もいた。旅立つ前の彼らの姿を検証した。

キーワード：イザベラ・バード、日本奥地紀行、東奥義塾、日本基督教団弘前教会

Three Christian Students Who Came to Meet Isabella L. Bird in Kuroishi and Activities of Hirosaki Church and Too-Gijuku

Miyoko TAKAHATA

Abstract：

The famous British lady traveler Isabella L. Bird was in 1878, on the way for *Ezo* , wandering through the north-eastern part of Japan. When she was staying in Kuroishi, Aomori Prefecture, three Christian students came to see her. They were the students at Too-Gijuku in Hirosaki, and also the members of Hirosaki Methodist Episcopal Church.

She had been writing the names of the three students on her book, but the part she had written their names was removed when it was republished as a new popular edition and so their true names have been veiled until today.

Now in this paper I examined to identify who and what these students were, in addition also about what their intentions were through their missionary work at the north end of Honshu.

The students who were baptized by Rev. John Ing, established their 'Hirosaki Union Church' with the assistance of Rev. Y. Honda who was the head master of Too-Gijuku. At the beginning of the church, most of the believers belonged to both the Church and the School where they studied and taught at the same time.

In those days, they walked for missionary work as "student helpers" as soon as they became baptized as Christians.

Then both Hirosaki Church and their school Too-gijuku were gradually building their organizations as if in a symbiotic manner, whose process I will follow.

In 1876, some other organizations sent to Hirosaki Church their missionaries to preach. Among them were W. Dening from Hakodate and J. Gulick from Yokohama, whose wife traveled in Kansai with Isabella Bird together. At the end of the year, Hirosaki Church decided to belong to the Methodist Episcopal Church.

At that moment of time the issue of the affiliation of the parties of Christian religion was not only one for Hirosaki church but also for all of the Protestant mission parties, which had been striving in their missionary activities in their ideal of union parties.

In this paper, I have tried to expose their real figures as those who, after having squarely coped with education, politics and culture in Aomori-ken, then, endeavored in establishing Aoyama-gakuin or helping Japanese Christianity evolve in Tokyo, for the journey of which they were now leaving their native towns.

Key Words：Isabella L. Bird, *Unbeaten Tracks in Japan*, Christian Students helper, Too-gijuku

はじめに

1878（明治11）年、まだ西欧人の報告のない日本の奥地＝東北の旅を続けていた英国の旅行家イザベラ・バードは、青森県黒石にやってきた。そこは旧黒石藩の城下町で、彼女の目指す蝦夷は目前だった。その町で彼女は偶然にも「ネブタ・ネプタ祭」を楽しむことができ、ひとりで人力車に乗り中野紅葉山（中野不動）に遠出するという冒険をし、部屋から隣家の女性の化粧を覗き、楽しい時を過ごしていた。困難だった東北地方の旅で、彼女がこんなにも羽根を広げるように自由であったのは黒石のみである。他地域においては、彼女は真面目すぎるほどに、学校、病院、警察、工場を訪れ、明治新政府の新制度下の地方における組織の活動の現実を記しているのである。しかし、黒石では、学校も、病院も見学することなく、気持ちのよい部屋での休息と、自由を楽しんでいた。ここに３人のクリスチャンの学生が訪ねてくるという出来事があった。この３人の学生については、弘前市に今もある東奥義塾の学生であるということ以外には誰か分からない[1]とされてきたが、イザベラ・バードは、この日本旅行を記した*Unbeaten Tracks in Japan*の初版の２巻本では、３人の名前をあげていた。本稿では、バードの記述をもとにこの３人の学生の同定を試み、また彼らの属した東奥義塾、弘前教会の当時の活動を検証した。

第１章　*Unbeaten Tracks in Japan* の普及版での初版からの削除と、黒石で会った３人の学生に関する普及版で削除された部分の翻訳

１．*Unbeaten Tracks in Japan* の初版（２巻）、普及版（１巻）について

イザベラ・バードの日本旅行記は訪日から２年後の1880年に*Unbeaten Tracks in Japan* というタイトルでロンドンのジョン・マレー社から２巻本として出版された。これには、東京から日光を経て新潟へ向かい、そこから蝦夷を目指した日本海側東北の旅と、京都、大阪、神戸、津、伊勢を訪問した関西旅行、さらには新潟、蝦夷、東京に関する覚書および食品や日本の一般的事項が含まれていた。

1885年に、彼女は同じジョン・マレー社から蝦夷、東北の旅を中心とした普及版の１巻本を出版したが、この版では、関西旅行や覚書が削除されるとともに、東北・北海道の旅のあちこちで記していた何ヶ所もの叙述が削除された。

日本では1973年に、高梨健吉が1885年の普及版を邦訳した『日本奥地紀行』が東洋文庫（平凡社）から刊行された。これにより我が国において、イザベラ・バードの旅が初めて紹介され、外国婦人の見た明治初期の東北の姿として現在に至るまで広く読み継がれてきた。しかしこの『日本奥地紀行』は１巻本の邦訳であることから、イザベラ・バードの日本の旅を理解するには不十分であるとする問題提起が研究者から出されていた[2)]。

2002年に楠家重敏、橋本かほる、宮崎路子によって初版の２巻本をもとに削除部分の大部分を邦訳した『バード 日本紀行』が雄松堂出版から刊行された。しかし、初版の２巻本には、この両者によって邦訳された他に、細部に渡り削除された部分がまだ残っている。栃木から新潟に至る部分の邦訳は武藤信義が『栃木史心会報７』（７,14,18～20号、1983,1986-89）に発表した。また筆者は本年報１号で青森県碇ヶ関部分の邦訳を紹介した[3)]。

本稿ではこれらを参照しながら論じていくが、以下でこれらを引用するにあたってはそれぞれの版の略記号を以下のようにした。

（Bird）：Bird,L.Isabella（1880）*Unbeaten Tracks in Japan*（２巻本）
　　初版に準じたGanesha Publishing Ltd.& Tokyo：Edition Synapse（1997）を使用。
（バードⅠ）：高梨健吉訳（1973）『日本奥地紀行』、平凡社ライブラリー（2000）を使用。
（バードⅡ）：楠家重敏、橋本かほる、宮崎路子訳（2002）『バード 日本紀行』雄松堂出版
［　］　　：上記二つの訳に含まれない部分の拙訳による引用は［　］を用い前二者からの引用と区別をした。

２．黒石の削除部分訳

本稿の目的とするイザベラ・バードが黒石で出会った３人の学生については、のちの普及版（１巻本）では削除された初版（２巻本）の黒石部分にその姓が記されていた。以下に示した高梨健吉訳『日本奥地紀行』（pp.323-324）に続く部分である。その後にこの３人の学生に関係する部分を翻訳して示した。

私は、三人の「クリスチャンの学生」が弘前からやって来て面会したいと開いて驚いた。三人ともすばらしく知性的な顔をしていて、きれいな身なりの青年であって、全部が少しばかり英語を話せた。その中の一人は、私が今まで日本で見たうちで最も明るく最も知性的な顔をしていた。彼らは士族（サムライ）階級に属していた。そのことは、彼らの顔や態度がすぐれていることから当然悟るべきであったろう。この家に英国婦人が来ていることを聞いて来たのだという。彼らは私がクリスチャンであるかと尋ねたが、私が『聖書』をもっているかとの質問に答えて本を取り出して見せるまでは、安心した様子を見せなかった。

弘前はかなり重要な城下町で、ここから三里半はなれている。旧大名が高等の学校《あるいは大学》

（東奥義塾）を財政的に援助していて、その学校の校長として二人の米国人（イングとダヴィッドソン）が引き続いて来ている。これらの紳士は、そのキリスト教的教育において精力的であると同時に、クリスチャンとしての生活態度もきわめてりっぱなものだったにちがいない。というのは、その教えに従って三十人も若者がキリスト教を信ずるに至ったからである。これらすべてが充分な教育を受けて、数人は教師として政府に雇われることになると聞いているので、彼らが「新しい道」（キリスト教）を受け入れたということは、この地方の将来にとって重要な意義をもつことであろう。

注：上記訳文の括弧内は2000年版の改訂にあたり付されたもので、イザベラ・バードの原文（初版、と普及版）にはない。

黒石の削除部分訳：*Unbeaten Tracks in Japan*（1880, Bird pp.377-378）

上記引用に続く

［キリスト教の発展のために、日本でなされた最も重要な仕事が、まったく、伝道諸組織の外、しかも伝道といったものが定着することが許されない地域でなされたということは、不思議な事実である。蝦夷（北海道）の札幌の農学校では、クラークの指導の下で学んでいる18人の若者が洗礼を受け、九州の政府の学校の科学教師である砲兵大尉だったL・L（リロイ・ランシング）・ジェーンズのもとでは、40人の士族（サムライ）階級の若者――彼らはいま京都で神学生である――が洗礼を受け、また弘前ではイング氏とデヴィッドソン氏により、洗礼を受けた。彼らは皆アメリカ人で御雇い外人であるが、これらの教師たちに許された自由さは、キリスト教が現在寛大に取扱われ、広まっているその程度を示している。

これら三人の学生たちは、Wakiyama、Akama、Yamadaと名前を教えてくれたが、彼らははるばるここに説教するために来たということだ。

警官はまったく妨害をしない、しかし、彼らは、「人々はもはや神様について話を聞くことには関心がない」と言う。Yamadaは「それは私の罪です」、「私には力がありません。キリスト教が目新しかった頃は、何百人という人々が説教を聴きに来たのに、今ではたったの何十人しか集まりません」と言った。

私は、仏教や神道のお坊さんや神主が妨害するからなのかと訊いた。彼らはそんなことはないが、でも人々は昔からの宗教にほとんど飽きている、だからといって新しい宗教を欲しがってはいないと言った。彼らは、明らかに優秀な若者たちであったが、彼らの英語はとても不正確であった。キリスト教を嫌っていると明言している伊藤は[訳注]夢中でアンズを煮込んでいるふりをしていて、近づいて来もしないし、通訳もしなかった。後で、彼は私をAkamaのとても感動的な熱のこもった講演を聴いている約100人の「キリスト教のお芝居」（キリスト教ごっこ）を見るようにと呼んだ。私は、学生たちと会うことには大変興味をそそられたが、しかし目下のところ、わざわざ弘前まで足をのばして、西欧人に会う気はそれに比べるとはるかに少ないので、彼らの師と顔を合わせることはしない。］

訳注：伊藤はイザベラ・バードの通訳兼旅の同行者である伊藤鶴吉（1858-1882）。

NOTE ON MISSION IN NIGATA（新潟に関する覚書）でも、同様に「教育を受けている伊藤ではあるが、宣教師達をひどく嫌っている。」[4]と彼のキリスト教嫌いについて述べている。

ここに見られるように、バードは彼ら３人の学生から直接その名前を聞き、また彼らの師の名前も同時に記していた。個人名が含まれる部分の削除については、彼女自身、［ハリー・パークス卿は公人ですので、私は彼については書いていますが、ここで他の人々が私に示してくれた親切や、日本のことを見るための私の準備に便宜をはかり、多大なご迷惑をかけている方々についてはほのめかすくらいのことしか出来ないのです。］[5]と記していることからも、普及版に際し意図的に削除されたと考えることもできる。

バードがこの部分を当時の日本の北端と南端のキリスト教宣教から書き出しているように、本稿では学生の集団受洗である札幌バンド、熊本バンドおよび弘前バンドから話を進める。次に彼らクリスチャンの学生の背景となる青森県津軽地方の伝道とさらにバードと出会った舞台となった黒石の伝道について記し、最後にこの３人の同定を行うという順で進める。

３．史料・資料の所在

３人の学生が所属していた東奥義塾と弘前教会については、それぞれに多くの史料が残されている。現在までに刊行された弘前教会の編年史は創立25、50、100、120年記念と回を重ね、その作業に際し集められた史料・資料も多い。同様に東奥義塾もまた、学校創立から50、100、120、130年に記念史を編纂しており、史料が多い。また、この両者と関係の深い青山学院史資料室にも多くの史料が残っている。このうち、東奥義塾と青山学院の図書館、資料室では、「手書き史料」および「マイクロ史料」に当たることが許され、３人の同定に役立った。

また両校には、当時東奥義塾において発刊された『開文雑誌』、バードも記したキリスト教誌『七一雑報』、メソジスト機関紙『護教』（創刊1891.11）が保存されており、本稿に関わる人々がそれぞれに寄稿したものが掲載されていた。また「弘前教会創立以来100年間の受洗者名簿」（青森県立図書館蔵）、『公会記事　弘前教会記録』（青山学院史資料室蔵）等多くの史料を利用させていただいた。これら史料・資料の調査の一方で、黒石の現地調査に臨み、さらに当時の弘前伝道と深い繋がりのあった函館の諸教会（聖ヨハネ公会、日本基督公団函館教会）と函館港税関での調査を行った。

史料・資料における外国人名の表記の違いについては、当時の教会・東奥義塾史料ではデビソン、ダビソン、ダビスン、デヴィドソンとカタカナ表記されているが、本稿ではデビソンに、またイング、インクはイング、ギウリク、ギュリクなどはギューリックに統一した。

資料中のデビソンの英語表記は、Davidson、Davissonがあったが、Methodist EpiscopalのMissionry Report（1872,1878,1879）の表記 Davissonに統一した。

日本人名では、つや・津や子、きく・幾久子など表記が異なる場合はかな名に統一した。史料掲載の場合は表記通りにした。現代では、表記上問題のある箇所も史料の場合そのまま使用した。

第２章　明治初期の伝道　―弘前教会・東奥義塾を中心として―

１．教育とキリスト教伝道

バードは、学生たちと会った話に続けて、日本におけるプロテスタントの初期の宣教成果であるバンド形成を次のように記している。［キリスト教の発展のために、日本でなされた最も重要な仕事が、まったく、伝道諸組織の外、しかも伝道といったものが定着することが許されない地域でなされたということは、不思議な事実である。蝦夷（北海道）の札幌の農学校では、クラーク氏の指導の下で学んでいる18人の若者が洗礼を受け、九州の政府の学校の科学教師である砲兵大尉だったL・L.・ジェーンズ[6]のもとでは、40人の士族（サムライ）階級の若者――彼らはいま京都で、神学生である――が洗礼を受け、また弘前ではイング氏とデビソン氏により、洗礼を受けた。］[7]

ここに「最も重要な仕事」と記されたのは、札幌バンド、熊本バンドと弘前バンド[8]と称される学生の集団受洗である。1872（明治５）年に、この３つのバンドに先立ち横浜バンドが誕生した。ここから、植村正久、押川方義、井深梶之助、本多庸一[9]など日本のキリスト教界の指導者たちが出た。この内、バードは新潟でパーム宣教医を助けていた押川と出会っている。

彼女が心に留めたのは、横浜バンドに続く、日本の南端と北端での伝道の成功である。前者は、熊本バンドと呼ばれ、1876（明治９）年１月30日に、熊本県の英語教師ジェーンズから指導を受け

ていた洋学校生徒、海老名弾正ら35人による熊本花岡山での信教の盟約を指す。この盟約が県に知れることになり、熊本洋学校は閉鎖され、ジェーンズは彼の学生たちをアメリカン・ボードにより創設された京都伝道師養成学校（同志社英学校）に送り込んだ。バードは、京都で同志社を訪れ、この学校の学生となった彼らの授業を参観し、また創始者である新島襄夫妻の招待を受けているので、これについての関心は深かった[10)]。後者は、北海道大学のクラーク（Clark, Wiliam Smith）で有名な札幌バンドで、1877（明治10）年札幌農学校の生徒がクラークの指導のもと集団受洗した。この時洗礼を授けたのはハリス（Harris, Merriman Colbert）である。この中には、札幌農学校２期生の新渡戸稲造、内村鑑三がいる。

バードが日本の伝道の外と言ったもう一つが本稿の舞台となる弘前バンドである。1875（明治８）年青森県弘前の東奥義塾の生徒（14人）がジョン・イング（Ing, John）の指導の下で集団受洗した。同一校の学生の集団受洗では全国で最も早く、弘前バンドは、この14人と同年10月３日に受洗した８人を加えた22人を指す。横浜バンドのメンバーのひとりであった同塾塾頭本多庸一と受洗した学生たちは、イングの指導のもとに同年「弘前公会」を創立した。

バードの声にもう少し耳を傾けよう。［彼らは皆アメリカ人で御雇い外人であるが、これらの教師たちに許された自由さは、キリスト教が現在寛大に取扱われ、広まっているその程度を示している。］と彼女は続ける。彼女の言うとおり、これら学生たちに授洗したお傭い教師たちは、いずれもアメリカ人であり、各宣教団が派遣した宣教師である。彼らの学生が士族であったように彼らもまた南北戦争を戦った軍人であった。

バードは、日本の政治文化の中心から離れた地で、彼らが地理的あるいは行動的に、その許された範囲内において、伝道をしたと述べているのである。この両者（許された自由度－広がりの程度［extent］）の関係を示すのが熊本での出来事である。「許された自由さ」を逸脱したジェーンズと彼の生徒たちは、地元での猛烈な反対に合い上述のように熊本洋学校は閉鎖された。

また彼女が伝道の「広がり［extent］」を問題にする場合、外国人旅行許可証に記された25マイルの条約制限区域を意識している（バードⅡ p.96）。神戸、大阪、京都での宣教について、「ほとんどすべての宣教師達は、条約の範囲内の地域で、定期的に巡回説教するが、ときとして旅券を持ってそこを越えて内地に入ることもある。」（バードⅡ p.173）と記している。つまり、条約で許可された居留地が日本人から見て外地であり、その外地内で外国人は生活することが義務付けられていた。しかし、お傭い外人教師となることは、日本人の居住する内地（外国人居留地を除く日本国内）に住むことを可能にした。その結果、伝道のチャンスが広がるということである。宣教師による伝道の範囲の限界を打ち破るには、日本人に雇われること――例えば御雇い外人教師として――が条件であり、それもその契約に当たっての条件次第ということであろう。またその就任に当たりキリスト教を教えないということがその条件になることもあった[11)]。

２．弘前教会と東奥義塾の共進化

弘前教会と東奥義塾はその成立において、あたかも車の両輪のような存在であった。これらのどちらかを欠いて、この二つの組織の存続は難しかったろう。津軽の地においてのみではなく、日本における明治初期のキリスト教伝道は、伝道と教育のコラボレーションの様を呈していた[12)]。

本稿では、教会組織としての現在の日本基督教団弘前教会を指す時は教会名の異なった時代も含めて弘前教会としたが、必要に応じそれぞれの時代の教会名を用いた。以下に弘前教会の現在までの名称変遷を記した。

［弘前教会の名称変遷］

1875-1876（年）　1877-1907（年）　1907-1942（年）　1942～（年）

弘前公会→弘前美以美（美以）教会→日本メソジスト弘前教会→日本基督教団弘前教会

津軽の地では、廃藩置県から間もない1872（明治５）年の末に藩校「稽古館」を継ぐ、私学東奥義塾の開学許可願いが青森県を通じて出された。許可が下りたのが、同年11月23日で、開学に際し、お傭い教師として、アメリカの改革派宣教師のウォルフ（Wolff, Charles H.H.）が招聘された。1874年まで滞在したウォルフの後継としてマクレイ（Maclay, Arthur C.）が来た。かれは、米国メソジスト教会日本宣教総理R.S.マクレイの息子である。この時彼はアメリカのウォスシャン大学の第１級生であった。マクレイは半年ほどで弘前を離れた。彼ら２人は英語学教師として雇われ、ウォルフは英語の聖書を教えたことが分かっている[13]。しかし、この間にキリスト教信者となる者がいなかったとのちにデビソンは1878年の「Missionary Report」[14] で報告している。

マクレイの後には、横浜公会に所属していた本多庸一に伴われたメソジスト監督派宣教師ジョン・イングがやってきた。1874（明治７）年12月22日のことである。彼は前２者とは異なり、英語だけではなく、理、化、数、博物、史学と広範な学問分野を担当した[15]。本多は着任早々に義塾塾頭になり、学校教育に当たると共に、イングと手を携えて伝道を開始した。イングは義塾隣の自宅で毎日曜日の午前中に、英語のバイブルクラスを開き、午後は本多が義塾講堂で邦語による説教をした[16]。雇用契約にないこの伝道は物議をかもしだし、義塾をキリスト教伝道の場にすることは好ましくないとして、結局義塾最高経営者である幹事の菊池九郎が家を借り受け、本多を住まわせた[17]。東長町のこの家を伝道所として、彼らは宣教を続けた。イングと本多の着任から半年後の1875（明治８）年６月６日には、東奥義塾の学生14人が集団でイングより受洗した。さらに４ヶ月後の10月３日には、８人の学生が受洗した。この22人の学生クリスチャンを弘前バンドと称し、このバンドの誕生はまさにバードの記した［伝道の外に於いてなされた重要な仕事］のひとつなのである。

弘前バンド結成は単に学生の集団受洗と言うだけではなく、もう一つの組織「弘前公会」をも生み出した。イングによる第２回の授洗が行われたその日、22名のメンバーが揃い、本多庸一により公会条例が読み上げられ、弘前公会の設立は成ったのである[18]。イングと本多庸一の就任から教会設立まで10ヶ月という短い期間である。

一方、東奥義塾はこの間、教育の場としてその姿を整えつつあり1875年、３月には当時の限られた文字情報を広く公開・活用する試みである博覧書院が、また４月には、女子部が開設された。博覧書院は一般にも公開され、入館料を払って書物を利用することができる民営図書館であった。同年は弘前バンド、弘前公会設立と相次ぎ、学校―教会の双方の組織化がなされたシステム構築の年であったといえるであろう。

明けて、1876年は、また新しい展開の見られた年である。この年、東奥義塾は明治天皇の巡幸に際し英語教育の成果を示して、「東京日日新聞」に取り上げられたこともあり、東奥義塾の名を広めた。

教会として活動を始めた弘前公会の記録を見ると、この年には各教派の宣教師たちが来弘し講演活動を行っているのがわかる。これについては、次節で述べる。弘前公会はバラ師のもとで、受洗した本多庸一の指導で横浜公会系として創立されたが、この年（明治９）には、公会を離れメソジスト監督派として教会活動をはじめた。つまりバードが来た1878年には、弘前美以（メソジスト）教会となっていた。

1877年には西南の役が勃発し、青森県は東北で最大の人員[19] を送り込むのであるが、『写真で見る東奥義塾120年』によると教職員生徒22人が従軍したと記されている。また「公会記録」には、９人の応募が記されている。つまり、義塾の22人中９人が受洗者である[20]。西南の役終結後、学生たちは義塾に再入学し、勉学と伝道の生活に戻っていた。

この間、義塾では、イングの斡旋により５人の学生がアメリカに留学、他方教会は日旺学校の組織化を進め、弘前に説教所、講義所を開いた。この頃には、キリストの体（からだ）を構成する彼らの教会は、「礼拝堂とそれに続く建物」を得て[21]、その外形も整いつつあった。

1878年は、バードが３人の学生と会った年であるが、義塾では、３月にイングの任期が切れ、同

月、同じメソジストのデビソン（Davisson, William Clarence）がお傭い教師として着任した。また中学開設、学内を印刷所とする『開文雑誌』の発刊と、学校の多機能化がみられた。

1878年の動きは、「東奥義塾一覧」とデビソンが伝道本部へ送った「Missionary Report」[22] からその一部を知ることが出来る。前者からは、上等中学第一級の生徒９人全てが受洗者であり、かつそのほとんどが同時に義塾の教師であったことがわかる。また初期の女性受洗者である菊池きく、脇山つやも小学課教師として名前が載っている。小学科の生徒として名前のある大和田志な、伊藤みさ、横山たけが1878年に受洗している。これは、それまでの女性受洗者が、信者の妻や母であったことから見れば、大きな変化であった。

後者の「Missionary Report」には、「我々の仕事は順調に進んでおり、現在の状況のもとで期待できる限りの急速な成長を遂げている――確かにここの生え抜きの教会に対する我々の援助の手段が可能にする速さで成長している。我々の宣教において、必要なのは「もっと多くの人を！」「もっと多くのお金をである！」とある。また同書には、「校長、副校長と教師10人がクリスチャンであり、それからするとこの学校はキリスト教の管理下にある（to be under Christian control）と言ってもいいだろう」と記されていることは注目すべきことである。宣教師としてのデビソンあるいはイングには、キリスト教の管轄下の学校という意識がはっきりあり、教育と伝道は切り離せないものであったが、受け手の日本人に、そのような明確な意識があったかどうかというと、学校教育とキリスト教を分離して考えていたのではないかと思われる。

当時、学校がキリスト教の管理下にあるかどうかの問題は、大きな問題であり、塾生の脇山義保は、当時の北斗新聞（1878.６.15）に次のような投書をしている。

「東奥義塾ハ東奥義塾タルノ論　前略・・或ル人來リ云ク東奥義塾ニ入レハ耶蘇教ヲ學ハサルヲ得スト聞ク果シテ然ルヤ否ト又人アリ云ク東奥義塾ハ耶蘇教學校ナリト其他此ノ如キノ言ヲ唱フルモノ指ヲ屈スルニ遑アラス夫レ東奥義塾ハ全ク耶蘇教ヲ學ハサルヲ得サルノ學校ニアラス又強テ誘導スルノ義塾ニアラサレハコレニ答フルニ學塾ノ體裁ト學課全體ノ真正トヲ以テセシニ…」

続けて、「東奥義塾を耶蘇教学校と云うのも理由のないことではない。塾中にその信者が多いからだ。だからといって学校の名にそれを負わせるのは笑うべきことだ。米国のように課程を設け学生の意思により履修の決定をしているのである。義塾の義塾たるところを知らない者に告ぐ」と続く。当時の義塾が教会と一体と見られ、それがまたジレンマでもあった。

少なくとも草創期の実体は、当時塾生であった山鹿旗之進が「その頃日曜日の午後信者は、参々伍々、市中や郊外に伝道に出掛けた。云わば信者残らず自任伝道者となって総動員の形だ。信者残らずと云ふとも義塾の学生だから」[23] と記したように、弘前公会と東奥義塾は一体のものであった。ただし、その逆（義塾＝公会）は真ではなかった。公会メンバーは、東奥義塾の学生の部分ではあったが、公会が東奥義塾に内包されていたと言うより、それぞれが個として立ち、相互作用を及ぼしていたと言うべきだろう。

義塾と公会は足並みを揃えるようにして、互いにシステムを構築していった。殊に上級男子生徒の受洗は宣教の範囲拡大に大きな力となった。「当時学生信徒は、受洗せば必ず伝道せざるべからざりき。されば彼等は三々五々に連れだちて、定日弘前付近―中郡、熊島、悪戸、濱町―は勿論、定日に黒石に出張せり。」[24] と教会の『五十年記念史』に述べられているように、学生の受洗はすなわち即伝道を意味していた。1878年は、弘前（３）、青森（２）、黒石（１）にそれぞれ講義所[25] が開かれた拡張の年でもあった。弘前教会・東奥義塾の1878年の歩みを簡単に眺めたが、バードがどのような伝道状況にあった津軽に来たかを知るためである[26]。

1879年までの東奥義塾と弘前教会の歴史を並列にみたのが表１である。

表１．弘前教会と東奥義塾

年、担当伝道者	日本基督教団　弘前教会	東奥義塾（藩校「稽古館」創立開校1786（寛政８）
1872（明治５）	初のプロテスタント教会、日本基督公会設立（３.１） 横浜公会において、本多庸一Ｊ・Ｈバラから受洗（６.９）	菊池九郎[27]、吉川泰次郎[28]、兼松成言[29]ら藩学をついだ私学設立を図る。慶応義塾にちなみ、東奥義塾と命名し、青森県を通して文部省に申請。東奥義塾開学許可（11.23） ウォルフ（アメリカ改革派所属宣教師）を招く（12月）
1873（明治６）	キリシタン禁制の高札を撤廃（２.24）	東北初の英学教師として雇い入れたウォルフ夫妻到着（２.６） 入校生募集、上等課程は正則の英学、下等課程６級から３級までは小学校に相当（２.15） 東奥義塾開学の式（２月） 開学時教員：幹事 兼松成言、副幹事 菊池九郎、成田五十穂、一等教授 吉川泰次郎他。 従来の教師の多くは生徒となる（２月） 菊池九郎主務となる
1874（明治７）	イング、本多庸一伝道開始（12月22日弘前着）	ウォルフ離任（１月） マクレイ（メソジスト教会総理R.S.マクレイの息子）（着任４月離任同年冬） Ｊ・イング（メソジスト監督教会宣教師）、本多庸一東奥義塾教師として着任（12月） 本多庸一、東奥義塾塾頭となる
1875（明治８） 定住伝道者 本多庸一 宣教師 Ｊ.イング	Ｊ.イングにより義塾生14名受洗（６.６） 横町（東長町）に仮礼拝所を設ける イング宅で、および第２回洗礼式受洗者８名 続いて日本基督弘前公会立会の式（10.３）	博覧書院（図書館）開設（３.９） 小学科に女子部開設（４月） イングにより義塾生14名受洗（６.６） 弘前公会は本多庸一と受洗した学生たちにより成立した（10.３）
1876（明治９） 定住伝道者 本多庸一 宣教師 Ｊ.イング	イングによる第３回洗礼式（２名、４.２） デニング函館より来弘（４.21）、10数回の講義に聴衆が増え200余名 第４回洗礼式（受洗者３名、７.30） 横浜からバラ、グリーン、ギューリックが来弘（９.２）、バラはイング宅、横町会堂で講義 函館からハリス夫妻来弘（10.10）、夫人の講義に300余名参集 メソジスト教会所属に決定、弘前美以（美）教会となる（12.20） イング宅にてクリスマス祝会、日旺学校生徒に聖書や菓子を与える（12.25）	受洗学生による弘前近隣の農村伝道 明治天皇来県、生徒９名英語スピーチ、合唱（７.15） 「東京日日新聞」に東北御巡幸の記事、東奥義塾の名は全国に知られる 太政大臣三条実美、東北巡視に際し授業参観 義塾生、山田寅之助、同窓の山鹿旗之進に勧められ日旺学校にいく。日旺学校は英語と邦語に分かれていた。邦語に参加した寅之助は、聴衆は皆学生、中に２,３の老婦人と、若き婦人と『護教』-「過去帖」に記す（1907.８.24）
1877（明治10） 定住伝道者 本多庸一 宣教師 Ｊ.イング	最初の「四季会」（メソジスト教会の教会会議）（１.５） 弘前日旺学校の組織化（４.８）、校長本多庸一、同補佐佐藤愛麿、書記伴野雄七郎、完全なる学校組織をなせり、同日開校[30] イング宅で聖餐会、第５回洗礼式（３名）（４.15） 第６回洗礼式（西南の役巡査応募者３名、６.23） 西南の役（２.15-９.21）巡査募集に応じる者９名６月24日出立、９月９,10日帰弘 ７回、Ｊ.イングによる最後の洗礼（２名、10.７） 元寺町に説教所を購入（秋） 土手町62番に講義所を開く（毎日・水）（11.７） 本多聖書販売のため伝道旅行[31]（12.15-１.22） 日旺学校吏員教師選挙、属会選挙（12.30） 属長伴野雄七郎、勧士脇山義保、古坂啓之助を選ぶ	 イングの斡旋により、珍田捨巳、川村敬三、佐藤愛麿、菊池軍之助、須藤泉、アメリカ、アズベリー大学に留学[32]（７.２弘前発、７.25横浜出航） 西南の役に教職員生徒22名従軍、この頃塾長菊池九郎、塾監兼松良（いらつ）

1878（明治11） 牧師 本多庸一 循回宣教師 W.C.デビソン	本多庸一函館において執事職に任じる按手礼を受ける（２.17） イングの後任 W.C.デビソン夫妻着任（２.26） イング夫妻離任（３.７） 本多庸一が事実上の牧師となる、デビソン宅で本多庸一による初めての洗礼式（４.７） 黒石に講義所を開く、聴衆200余名（５.３） 青森に講義所を開く（６月初旬） 脇山義保と古坂啓之助を地方伝道者とし、執事の職に推薦決定（第二回季会 6.15） デビソンによる洗礼式（２名、6.16） デビソン夫妻函館に転出（12.12） 本多庸一による洗礼式（男３ 女４、10.６）	イング離任：会友脇山、塾吏須藤、藤崎まで送る（３.７） W.C.デビソン着任（３月） 中学開設（本科、予備科）、小学科296名（３.11） 塾長の呼称が用いられ、本多庸一塾長となる 『開文雑誌』発刊（本社 東奥義塾内、開文社）（９.29） 10.６の受洗者の女性は小学科の女子生徒３名含
1879（明治12） 牧師・執事 本多庸一 担当宣教師 W.C.デビソン	デビソン宅で四季会（１.18） コレラ流行し、土手・和徳・黒石の講義所を中止（９月） 菊池宅の会合において、明年から自給することを決議する、ただし黒石・青森の分を除く（12.17）	自由民権運動に共鳴した人々が共同会を結成し、会員約100名が東奥義塾に集合（２.７） 第１回中学卒業式（６.16） 山鹿旗之進、山田寅之助ら横浜神学校に行く（８,９月）

参考：『120年のあゆみ　日本基督教団　弘前教会』日本基督教団　弘前教会、1995。『東奥義塾120年』東奥義塾、1992。中田久吉『弘前美以教会略年史』教文館、1900。『開学百年記念東奥義塾年表』東奥義塾、1972。
注：括弧内の数字（月．日）、弘前教会、東奥義塾の双方の記述での特に、年月日の違いは、東奥義塾史料「開学許可書」、弘前教会「公会記事」等で確認統一した。

表２には、弘前においての教会成立からバードの来た頃までのクリスチャンとなった人数を示した。

表２．弘前教会での洗礼式　1875-1878（明治８-11）

回	年月日	宣教師	受洗人数	累積（人）
1	1875. 6. 6	J・イング	男14人（東奥義塾生）	14
2	10. 3	〃	男 8（東奥義塾生）	22
3	1876. 4. 2	〃	男 2	24
4	7.30	〃	男 2 女１（本多みよ）	27
5	1877. 4.15	〃	男 3	30
6	6.23	〃	男 3（含 菊池九郎*1)）	33
7	10. 7	〃	男 1 女１（菊池きく）	35
8	1878. 4. 7	本多庸一	男 3 女１（脇山つや）	39
9	6.16	デビソン	男 2	41
	10. 6	本多より？	男 3 女４（山田きよ,大和田志な*2)）	48

＊１）東奥義塾の創立者のひとり、菊池きくはその母。

＊２）山田きよ：山田源次郎、寅之助（義塾生）の母、大和田志な：東奥義塾女子部最初の受洗者、受洗時17歳

３．明治９年の諸派伝道

本稿訳文の最後に［私は、学生たちと会うことには大変興味をそそられたが、しかし目下のところ、わざわざ弘前まで足をのばして、西欧人に会う気はそれに比べるとはるかに少ないので、彼らの師と顔を合わせることはしない。］という記述がある。これは、バードに会いに来た３人の学生たちが、バードに弘前に来て彼らの師（デビソン）に会うようにと言ったということだろうか。しかし、先を急ぐバードは弘前に立ち寄る気持ちはなくそのようなことに関心がない（care far too little）というのである。しかし、彼女は奥地の伝道に興味がなかったということではない。彼女は、新潟、函館、神戸築地の聖公会の伝道拠点を訪ねているのである。

表１の1876（明治９）年には、デニング、バラ、ハリスなど他地区からの伝道講演があったこと

が記載されている。前年に設立された弘前公会の支援に、函館、横浜で伝道していた諸派の宣教師たちが弘前にやってきて講演をし、いずれも何百人という聴衆が参加し盛会であった。しかし、彼らは単に弘前公会の支援に来たのであろうかという疑問が起こる。

明治８、９年は、宗派を超えて合同で宣教をしてきた日本基督公会に宗派問題がおこり、1876（明治９）年の末に弘前教会はメソジスト教会に所属を決定した。それは日本において、Union Church（公会）を形成し、宗派を超えて伝道を続けてきたプロテスタント宣教の転換点でもあったと考えられるのである。表３に明治９年に弘前に来た宣教師とその経歴をまとめた。

表３．1876（明治９）年の弘前における諸派伝道と来弘宣教師の経歴

４月21日－５月８日 函館教会デニング氏（弘前に）来る。

・Dening, Walter（1946-1927）英国教会宣教会（英国聖公会宣教協会＝CMS[33]）派遣の宣教師。1874年５月函館着任民家を借りて伝道をはじめる。

９月２－６日　横浜に在るバラ、グリイン（グリーン）、ギウリク（ギューリック）の３人弘前に至る。

・Ballagh, James Hamilton（1832-1920）オランダ改革（ダッチ・リフォームド）派宣教師、1869年来日。ヘボン、ブラウンらと共に宣教、横浜日本基督公会設立、日本基督一致教会（1877設立）。本多庸一ら横浜バンドメンバーに授洗。

・Green , Danniel Crosby（1843-1913）アメリカン・ボード（会衆派系の外国伝道局）派遣の最初の宣教師、横浜公会（1874）に協力、フルベッキ、ヘボン、ブラウンと協力して伝道、聖書日本語翻訳委員のひとり。

・Gulick, Orramel Hinckley（1830-1923）アメリカン・ボード（会衆派系の外国伝道局）派遣の宣教師、1871年来日、1872年から神戸（山手）教会、最初のキリスト教週刊紙『七一雑報（Shichi Ichi Zappo)』（1875.12月～1883.６月、全８巻25号）を創刊。アメリカ聖書会社の邦訳聖書出版・販売の責任者。

10月10－17日　函館在留ハリス夫妻来る。

・Harris, Merriman Colbert（1846-1921）アメリカのメソジスト監督教会の日本最初の宣教師、1873年来日、1874年より函館駐在、函館教会創立。

・Harris , Best Flora（1850-1909）アメリカの詩人、M・H・ハリスの夫人。新谷武四郎訳『ハリス夫人詩集』1971、『土佐日記』の英訳。

札幌バンドの佐藤昌介、内村鑑三、新渡戸稲造らに感化を与える。

12月20日　弘前公会はメソジスト教会所属を決定、「弘前美以教会」となる。

参照：「公会記事」弘前教会、海老澤亮『キリスト教百年史』日本基督教団出版部、1959年、『キリスト教大辞典』教文館1963年、『キリスト教人名辞典』日本基督教団出版部1986年。

表３に示した宣教師たちとバードとの関係を見ておこう。これらの人々とバードとは、不思議な繋がりがある。ギューリックは、彼女の乗った船が横浜に着岸した時、最初に彼女に助けの手を差し伸べた人である。バードは横浜に着いた時、迎える人もなくたったひとりで横浜に着いた船の中で、さびしく、ぼんやりとしていた。そこに現れたのが、彼の娘を迎えるために上船してきたギューリック博士であった。彼は、親切に彼女の下船の世話をしてくれた（バードⅠ p.25)。彼が神戸に拠点を開くに至った事情や彼の発刊していた「七一雑報」についても記している。さらにギューリック夫人とバードは、後に関西旅行を共にしている（バードⅡ p.219-240)。バードが東京から送った第１便第４信（５月27日）では、築地の居留地の英国聖公会の部屋で、新潟から来ていたファイソン氏と蝦夷地から来ていたデニング氏とに会ったことが記されている（バードⅡ p.17)。彼ら

は彼女に彼らの伝道拠点を訪ねるようにと誘い、事実、彼女の旅はまず新潟に向かい、そこから函館を目指す旅であった。バードにとってデニングと会うことは重要であった。彼女の日本訪問の主眼は蝦夷のアイヌの研究にあったが、当時デニングはアイヌ伝道を行っていた。彼の後を継いだのが1879年に函館に来たバチェラー（Batchlor, John,1854-1944）である。

もう一度表３を見てみよう。４～５月に函館から弘前を訪れたデニングの滞在は半月以上に及びこの間に４回の講演をした。それには200人以上の聴集が会したことが記されている。９月にはバラ、グリーン、ギューリックの３人がやってきて、バラの講演会があった。これにも200人が集まったと記されている。10月には函館よりハリス夫妻が来て一週間滞在し、その間夫妻は講義をしている。これら外国人の講義はそれぞれが数回行われ100～200人くらいの人が集まったと記されている。中でもハリス夫人の講義には多くの人が集まったようである。10月16日の公会記事には「今晩会堂に而女子集会ありハリス女性講義あり聴衆男女共三百余人」と、その盛会ぶりを記している[34]。

これら諸派伝道の影に、弘前公会の所属問題があったことは、大木、相澤[35]などにより認められてきた。デニングの場合は、この地に聖公会の設立が可能であるかを調査に来ていたといわれている[36]のに対して、バラとハリスの来弘は複雑である。弘前公会は、バラにより洗礼を受けた本田庸一のもと、バラの率いる公会に所属していた。しかし、彼と共に伝道にあたり、弘前で洗礼を授けていたのは、メソジスト派のイングである。宗派的捩れは最初から存在していたのである。相澤は、弘前公会設立にあたり牧師就任の依頼を受けたイングが「日本語に習熟していない」との理由で辞退したことについて、「他派の牧師に就任するということは、仏教に例を引いて、浄土宗の僧侶に禅寺の住職就任を依頼するに似ている。よってメソジスト派のイングが改革派のバラの率いる日本基督公会の牧師に就任することはない」[37]としている。イングが牧師として就任したのは、12月20日にメソジスト教会への帰属が決まった後である。

山鹿旗之進は、この所属問題に関して、「東奥義塾の事情により」[38]と記し、義塾教師であるイングと函館にいたハリスが関わっていたことを示唆すると同時に、バラの滞在にも触れ、本多庸一から聞いた話として「バラさんにも充分の諒解があった」としている。

日本における初期のキリスト教伝道について、バードは次のように述べている。「実に皮肉なことだが、今までなしえなかったキリスト教会の連合をここ日本で証明している」（バードⅡ p.16）。「さまざまな宗派の当事者達は外見上の対立さえも控え、親しく協議するために集会を持っている。監督教会派、バプチスト派、組合教会派等という区々の名称を永続させるのではなく、「キリストの弟子であることが優先される」のである（前掲書p.280）。「公会記事」もまた諸派伝道には「大いに教勢を助けられたり」と公会の理想を掲げる。公会の理想は、超宗派を掲げており、1876年のこの時点では、弘前公会の記事にみられるように各派の協働による伝道が可能であった。

しかし、バードの来た1878の事情は少し変わっていた。1876年に弘前公会は弘前美以教会（メソジスト）となり、1877年には、バラ＝ブラウンは日本基督一致教会を創設、さらに日本組合教会の独立を経て、超宗派の公会は３つに分かれた。

バードの足跡が明らかに、CMS（英国教会宣教協会）を辿っていることに注目すれば、「弘前に彼らの師に会いに行くことに関心がない」とした記した理由が上記のような教会の所属問題にあったということが考えられる。牧師の娘であり[39]、教会に関わっていた彼女には、当然のことながら、若い３人の学生には興味があったが、弘前教会が超宗派の公会（Union Church）から離れて１年半、さらに一致教会の設立から１年と少しの時期を考えると、あえて訪ねることはなかったということだろう。

第３章　イザベラ・バードに会った３人の学生

１．黒石における伝道

イザベラ・バードが逗留していた黒石は当時、青森県南津軽郡第二大区に属し、南津軽郡の郡役所が置かれていた。1656（明暦２）年に、弘前藩から「黒石津軽家」は内分分知を受け、この「黒石領」は1809（文化６）年に「黒石藩」となった。かつての城下町黒石をバードの来た1878（明治11）年の『共武政表』『県治一覧表』にみると次のようである。

【黒石町の概況】

『第二回共武政表』（明治11年）参謀本部編纂

「黒石町、戸数1,212、人口：男3,089、女2,960、寺院９、学校１、馬（駄）256、車輌：荷１、人力26」

『青森縣治一覧表　明治十一年』（編纂：庶務課記録掛、出版：青森縣、明治12年12月16日）

「黒石病院（黒石横町、医師４人）、四等郵便局、五等郵便為換所、弘前署黒石分署（巡査６名）、通運会社、黒石小学校（教員：男15、女１、生徒：男349、女96）、劇場、報時鐘」

これら統計表の示す黒石の町は、明治新政府が中央集権国家として構築されつつあった時代に地方の末端で警察、学校、郵便、病院といった整備が整いつつあったことを示している。また高等教育機関や裁判所などは、弘前に置かれていた。

南津軽郡の中心地黒石に於いて本格的キリスト教伝道がはじまったのは、1878（明治11）年５月３日のことである。それ以前の弘前公会時代から受洗した学生による黒石伝道は行われていたが、この日、弘前教会（弘前美以教会）は黒石に開設した講義所で、講義を行った。この年の「公会記事」には、「五月初旬ヨリ黒石ニ講義場ヲ設ケ毎金曜日出張講義ス聴衆大凡百五十人位」と記されている。『弘前教会五十年記念史』（p.８）から黒石伝道のはじまりを整理すると次のようである。

月　日：1878年５月３日
場　所：黒石町前町鳴海旅館
伝道者：デビソン、田中五郎[40]、本多斎[41]、古坂啓之助[42]、山鹿旗之進[43]
聴　衆：農、工、商、小学教師、総て200余人
内　容：聖書の講義（マタイ５）、賛美歌、祈祷

また地域担当牧師は脇山義保（よしやす）であった。1878年の「Missionary Report」には、1878年７月８日付けの任命表が次のように記載されている。

「HIROSAKI CIRCUIT —W.C. Davisson,Missionary in Charge; Tera Machi, Y.Honda; Dode Machi, K. Kosaka; Kuroishi, T. Wakayama; Aomori,to be supplied.」

〔弘前巡回地区—担当宣教師Ｗ・Ｃ・デビソン。寺町、本多庸一。土手町、古坂啓之助。黒石、若山辰五郎。青森未定。〕これによると黒石の担当者は1878年４月７日に受洗した若山辰五郎ということになる。しかし、このWakayamaはWakiyama（脇山）の間違いであるとされている[44]。

「公会記事」に見ると1877年12月30日に古坂・脇山は勧士[45]に推挙され、1878年６月には共に「本処伝道者」の免状を授けられている。その２人がそれぞれ青森・黒石の担当牧師になったということだろう。講義所には、1878年６月上旬、本多斎、長谷川有造等が講義に、７月には山鹿元次郎が来た記録（公会記事）があり講義は続けられていた。ここまではバードが黒石に来る直前の状況である。この後は、「公会記事」によると同年12月中旬から黒石での講義は金曜日から日曜日に変更になり、昼夜２回行われていたが、翌1879年９月の記事では、コレラのため講義を廃したとある。

当時の黒石での伝道を如実に表している記事がある。バードが黒石を去って間もなく、８月26日の北斗新聞にはかなり多くの聴衆を集めていたことや石を投げる人がいたことなどがわかる次のような記事が出た。

【ヤソの説教に乱暴】

黒石へも弘前より時々出張してヤソ教の講義をされ、聴聞人もたくさんあれど表より砂礫（されき）など投げ込むことは毎度のことにて、教師は物ともせず、講義をさるるというが、ヤソをきらいな人があるだろうが、きらいなら堂々と議論でもすればよいのにかくの仕業とは。（北斗：1878.８.26）

次のバードの記述と比べてみよう。

［警官はまったく妨害をしない、しかし、彼らは、「人々はもはや神様について話を聞くことには関心がない」と言う。Yamadaは「それは私の罪です」、「私には力がありません。キリスト教が目新しかった頃は、何百人という人々が説教を聴きに来たのに、今ではたったの何十人しか集まりません」と言った。］[46]

前者は、「聴聞人もたくさんあれど」と言っているが、後者では、Yamadaがバードに、黒石に講義所が開かれて３ヶ月が過ぎ、目新しさの薄れたキリスト教の説教に来る人が減ってきていると言うのである。1879（明治12）年１月の「四季会の記録」では日曜学校（弘前２、黒石１ヶ所）の出席平均50人、前季に比すれば10人の減員なるべしと記されている。（弘120年史）報告日からみて、この時の報告は、1878年の９～12月にあたり、その前季はちょうど５～８月にあたる。Yamadaがバードに話したように最初は150～200人もいた聴衆は、バードの来た頃には毎回60人ほどになっていたということであろうか。しかし、明治の10年代の宣教とすると、本州北端の地の人口6000人の町で、毎週のように、キリスト教の話を聞こうと集まった人々の数は驚くほど多いと言わざるを得ない。実際、前掲の新聞に見られるように、砂礫（されき）を投げる人もいる中で、一般の人々がキリスト教を受入れることは容易なことではなかった。Yamadaの言う珍しさが当たっていると思われるのは、この翌年にアイヌ伝道のバチェラー氏（会衆派=聖公会）が黒石に立ち寄り、邦語で説教をしたときには、３百人を超す人が集まった（公会記事）という事からも察せられる。この時は、本多庸一も同行し、合同講演であった。

この後、美以（メソジスト）（美）教会任命の黒石の担当は、脇山義保（1878年）→古坂啓之助（1880-81年）→山田源次郎（1882-83年）→珍田捨巳（1884年）→藤田匡（1886-1887年）と変わる。

ところで黒石の講義所は前町の鳴海旅館ということになるが、鳴海旅館と確定するにはまだ幾つかの問題が残っている。同年９月29日発刊された『開文雑誌』には、販売所として「黒石横町　鳴海鐵太郎」[47]の名がみられる。ただし、鐵太郎の名はこの１号だけで、２号（1878.12.25）から５号（1879.12.31）までは、「黒石横町　鳴海鐵三郎」となっている。

『開文雑誌』の編集印刷人は、黒石担当牧師であった脇山義保である。とすると、講義所であった鳴海（旅館）が同時に販売所であったとしてもおかしくはないが、これら両者は町名と職業が異なる。この二者が混同されることはないのだろうか。この鐵太郎の５男に詩人の鳴海要吉がいる。

相馬正一「鳴海要吉論（一）」[48]によると、要吉の家は黒石の陣屋の北に位置していたことから、「商家としてはかなり大きな家で、「お城のナルサン」という異名で知られていた」という。「鳴三」（ナルサン）は要吉の祖父が三次郎という名前であることから付けられた屋号で呉服商であったが、要吉が小学２年のとき（明治22年）に横町２番地から前町へと移った。『開文雑誌』に見られる鐵三郎という名前はナルサンとの混同と考えられ、『開文雑誌』が販売された「黒石横町　鳴海鐵太郎」の家は、横町２番地の鳴海要吉の生家であった[49]。「鳴三」が前町に移ったことが「前町鳴海旅館」と関係があるかどうかの確認はできなかった。

２．ステューデント・ヘルパー

山鹿旗之進の履歴書に書かれた「スツウデント・ヘルパル」という単語は、各教会史「公会記事」

などにはない言葉である。ステューデント・ヘルパーの立場、その活動を検証した。

まず、ステューデント・ヘルパーという言葉からみていきたい。「ステューデント・ヘルパー」という言葉は、「公会記録」「四季会記録」東奥義塾の公的文書（義塾一覧、俸給書）には見当たらない。文字として見られるのは、山鹿旗之進の履歴書とデビソンの送ったミッショナリー・リポートである。

①「明治十二年一月スツウデント・ヘルパル（Student Helper）同十四年八月地方伝道者に挙げられる」[50]：山鹿旗之進の履歴書　青山学院蔵。

②［Until December,1877,no salaries had been paid to the helpers; at that time one student helper began to receive a small salary］：Davisson,W.C. ‘ *60th annual Report of the Missionary Society of the Methodist Episcopal Church for the year of 1878*’, *Missionary Report.*（下線部筆者）

③「ステューデント・ヘルパーと称して先輩の後について土手町や、黒石その他で伝道にあたっていた。」：相澤文蔵『津軽を拓いた人々』弘前学院、p.144、2003年。

④「その頃日曜日の午後[51]」信者は、参々伍々、市中や郊外に伝道に出掛けた。云わば信者残らず自任伝道者となって総動員の形だ。信者残らずと云ふとも義塾の学生だから、説教の種本としてPeep of DayやCome to Jesus など英語の小冊子を携帯して、近くは悪戸、濱町、遠くは黒石辺まで泊りがけで出張伝道した。：山鹿旗之進の口述原稿：青山学院蔵。

⑤「當時學生信徒は、受洗せば必ず傳道せざるべからざりき。されば彼等は三々五々に連れだちて、定日弘前付近――中郡、熊島、悪戸、濱町――は勿論、定日に黒石に出張せり。爾來學生等は三里の道を徒歩にて徒還するを常としたりき。」：高木武夫編集『日本メソジスト弘前教会五十年記念史』日本メソジスト弘前教会、p.８、1925年。

これらを整理してみよう。

（１）　ステューデント・ヘルパーという呼称があった。①と②はステューデント・ヘルパーの存在を示す記述である。④は受洗した学生たちは自任伝道者となって歩いたとなっていて、③⑤と共通しているが、ステューデント・ヘルパーとしての意味が異なる。前者は職（教会の）を表し、後者は自らを伝道者と称したという意味である。この言葉は山鹿旗之進の文書に依っていると考えられる。

（２）　受洗した学生は学業の合間に弘前近郊と黒石の伝道に歩いた。③から⑤まで共通している。旗之進自身も近隣の伝道については多くの記述を残しており、いずれも弘前、黒石となっている。これが、ステューデント・ヘルパーの活動範囲ということであろうか。

（３）　日程はそれぞれ異なっている。④日曜日、⑤定日となっている。「公会記事」では、1878年５月より毎金曜日となっている。これらから、旗之進が受洗した1877年春は日旺学校の後、午後に近隣を歩いていたのを1878年になって黒石に講義所が設けられ、それに伴い曜日も定まったと考えられる。同年に、本処伝道者という地域伝道者の資格が与えられ本格的地域伝道がはじまったとみるべきだろう。デビソンのリポート②もこの間の事情を示している。

（４）　1877年頃からの黒石伝道の記述は他にもあり、西南の役からもどり再び義塾に入学した山田寅之助が弘前教会の日旺学校で教え、郊外や黒石等に伝道したと書いている[52]。
長谷川朝吉（西南の役に出兵の前日受洗）も上記の土手、和徳、黒石の講義所で講義がある

時は、青年会はその前座を努めるのが例であったと、若者たちが伝道の助けをしていたことを記している[53]。

また「公会記事」には1878年７月22日に、当時旗之進と同じ下等中学第一級に在籍していた山鹿元次郎が黒石に行ったことも記されているので、彼もまたステューデント・ヘルパーとして行動していたと考えられる。

これらの中で、共通しているのは彼らがいずれも東奥義塾の学生で弘前教会に属し、弘前やその近郊・黒石の伝道に歩いていたということである。この条件を満たす者をステューデント・ヘルパーと称した。その中には２種類あり、組織によって認定され、時には給料が支払われていた者と、自任伝道者として近隣の伝道に歩いていた者とがいた。だが、どちらも学生の補助伝道者と言う意味で、ステューデント・ヘルパーだった。

すなわち、受洗した彼らは、奉仕の業に適した者にされたとしてキリストの体（からだ）（教会）を造り上げるために働いた（エフェソ４：11）。体（からだ）全体は、あらゆる節々が補い合うことによってしっかり組み合わされ、おのおのの部分は分に応じて働いて体を成長させる（エフェソ４：16）ものであるというキリストの教えに基づいた行動だったと考えられる。彼ら学生信徒は教会草創期にあって、自ら教会を構築する部分の役割を果たしていたのだ。

彼らは「学」と「教」を同時にしていたがそれは学校と伝道の双方に言うことができる。（本稿２章２、東奥義塾で彼らは同時に生徒であり教師であった。）すなわちこの「受信」⇔「発信」が津軽における教会形成（キリストの体（からだ））に果たした役割は大きかった。「受」⇔「発」の限りない相互作用の連鎖こそ、形成期の教会の自己組織化を促したが、かれらステューデント・ヘルパー（必ずしも資格を問わない）は、その自己組織化する体（からだ）の一部となって働いていた。

以上は弘前教会に関してのステューデント・ヘルパーについてであるが、バードはこの言葉を使ってはいないものの京都キリスト教徒の学生たち（同志社）について、同様の姿を述べている。すなわち「数名の学生はすでに休暇を利用して説教をしている」「京都キリスト教徒の学生たちは実に熱心であり、休日返上で田舎に出て説教をし、日本のキリスト教化を目指している」[54]。

３．イザベラ・バードと会った３人のクリスチャンの学生

黒石で、楽しい時を過していたバードのもとに弘前から３人の「クリスチャンの学生」がやって来た。彼らの名前は、‘Wakiyama, Akama, and Yamada’という[55]。

（１）Wakiyama：脇山義保（よしやす）（写真１）

写真１：脇山義保：函館教会時代

出典：相沢文蔵『津軽を拓いた人々』弘前学院、p.181、2003年

弘前教会の受洗者名簿中には、２名の脇山がいる。脇山義保とその妻つやである。バードの記した‘they were superior young men’また、かれが黒石の担当牧師であったことからWakiyamaは義保と同定した。

彼が受洗したのは、1877（明治10）年10月７日、イングによる弘前での最後の受洗者のひとりである。

脇山義保は、当時の受洗者が津軽藩士族の子弟で東奥義塾の生徒であった中では、異色の存在である。彼は岩手県遠野出身の警察官であった[56]。彼は自身の職歴について、「在官中明治八年北津軽郡元第五区警察署に任タリシ時」[57]と記している。『青森県警察史』をみると、名簿の「五所川原警察署長」[58]欄の最初に、脇山義保の名が載っている。それには第五大区警察出張所長、階級は十五等出仕として1875（明治８）年４月に任命を受けたことも記されている。ただ、彼の出身地、転出年月の欄は空白である。1877（明治10）年２月に第五大区警察出張所は、五所川原警察分署となり、所長の名称は署長へと代わった。この時の新制度により階級にも警部という名称が用いられ

るようになったので、脇山は警察制度変換期以前に、転勤あるいは辞職したと考えられる[59]。

このあたりの事情を、山鹿旗之進は、「岩手県遠野士族で、弘前に赴任した警部であった脇山義保は、思うところあって、職を辞して東奥義塾に入学し、半ば教えながら、学んでいたのを本多庸一が引き取り同居させた。本多庸一夫妻の生き方に感銘した義保は、基督教の何たるかを知らぬ前に、幾ほどもなくイングより受洗した」と述べている[60]。

「半ば教えながら、学び」と述べられている学生兼教師という立場は、「開学時、従来の教師の多くは生徒となる」と記されており珍しいことではなかった[61]。これを示すのが「義塾一覧」の教師、学生名簿である。1878年時点において、上等一級中学生は、一名を除いて、英語の教師欄にも名前が見られる。だが、脇山義保の名はこの中にはなく、妻のつやの名が小学教師欄に記載されている。彼が義塾生であったことを窺わせるのは同年の北斗新聞（1878.６.15）[62] に「東奥義塾ハ東奥義塾タルノ論」へ「同塾生」として投稿していることである。彼の名と義塾を繋ぐのは当時発刊された『開文雑誌』（写真２）である。『開文雑誌』（写真３）の本社および印刷所は東奥義塾内にあり、義保はその編集兼印刷人（第１-３号）であった。第４号からは編集兼印刷人は今宗蔵（第４-５号）に代わり、第５号（1879.３.31）に執筆した彼の身分は社員となっている。ただし当時は、義塾への入学は入社であり学生は社員ということになるので、社員・学生のどちらの意味にもとれる。

写真２：開文雑誌第１号と後ろに記された その販売所 『開文雑誌』東奥義塾蔵

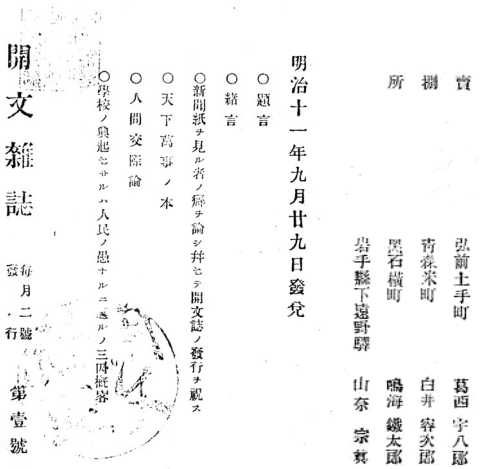
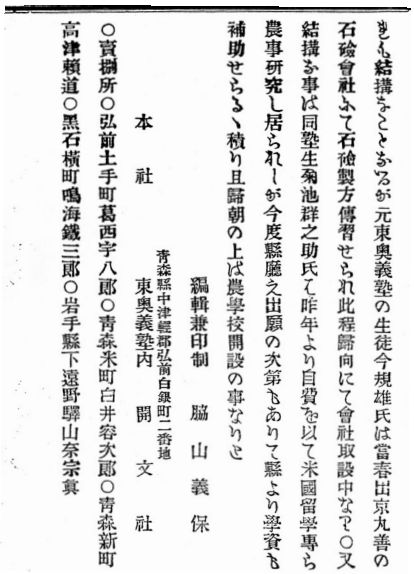

開文雜誌
毎月二號發行
第壹號
○題言
○緒言
○新聞紙ヲ見ル者ノ癖ヲ論シ幷セテ開文誌ノ發行ヲ觀ス
○天下高等ノ本
○人間交際論
○學校ノ興起セサルハ人民ノ愚ナルニ基ルノ三條紙幅
明治十一年九月廿九日發兌
賣捌所
弘前土手町　葛西宇八郎
青森米町　白井容次郎
黑石横町　鳴海鐵太郎
岩手縣下遠野驛　山奈宗真

写真３：開文雑誌第２号明治12年12月25日


もしも結構なことなるが元東奥義塾の生徒今規雄氏は當春出京丸善の
石硯會社ふて石硯製方傳習せられ此程歸向にて會社取設中なり○又
結構ふ事ば同塾生菊池群之助氏て昨年より自費を以て米國留學專ら
農事研究し居られしが今度縣廳ゑ出願の次第もありて縣より學資を
補助せらるゝ積り且歸朝の上ば農學校開設の事なりと
編輯兼印制　脇山義保
本社　青森縣中津經郡弘前白銀町二番地　東奥義塾内　開文社
○賣捌所○弘前土手町葛西宇八郎○青森米町白井容次郎○青森新町
高津頼道○黑石横町鳴海鐵三郎○岩手縣下遠野驛山奈宗真

これは『七一雑報』の地方版とも言うべき雑誌で1878年から1879年にかけて計６号が刊行された。上掲の写真には脇山の出身地の岩手県遠野や黒石の販売所の名前が見られる（写真３）。

脇山の教会での立場はどうだったのだろうか。1877（明治10）年10月の受洗後から彼は講義者として「公会記事」に頻繁に登場する（1877年10月14日、11月４日、同７日、12月１日、同８日）。12月25日には「伝道者の望ミヲ公言セリ」と記され伝道師となる決意をしている。受洗後３ヶ月にも満たない12月30日には勧士に挙げられている。年が明けた1878年２月15日にも講義をした記録があり、彼は公言したように、伝道者の道を歩み始めていた。また１月２月には、彼に最初の給料が支払われたことがミッションに報告されている。‘1878,Rev. Honda and T. Wakayama received their first wages.’とMissionary Reportに記されたのがそれである。T.Wakayamaは脇山の誤りとされていることは本稿３章１で述べた。

表４　明治10年４月15日の受洗人、受洗希望者

受洗人	山鹿旗之進（17歳）
	山田源次郎（18歳７ヶ月）
	長谷川有蔵（21歳８ヶ月）
同時洗礼所望之面々	
	脇山義保
	千葉健之助（18歳７ヶ月）
	長谷川朝吉（16歳２ヶ月）
	山田子之助（寅之助）（16歳）

脇山の名前が、「公会の記事」にはじめて見られるのは、1877年（明治10）年４月15日彼が洗礼を所望した時である。この日の受洗人、受洗所望人は、バードに出会った３人および黒石伝道に特に関係が深いので表４に示した。脇山をはじめ山田兄弟、山鹿の名がみられる。

この間の黒石伝道に関わる彼の立場は次のようであった。

５月３日：黒石に講義所開設

６月15日：脇山義保、古坂啓之介に本処伝道者の免許

７月８日：弘前巡回地区任命表；担当宣教師Ｗ・Ｃ・デビソン。寺町、Ｙ・本多。土手町、Ｋ・古坂（啓之助）。黒石、Ｔ・Wakayama（脇山義保の誤り）。青森未定。

バードは、［彼らはここに説教するために来た］（本稿１章２）と彼らが言ったと記しているが、事実脇山は黒石の担当伝道者であったのだ。

また彼は投稿魔であったのではないかと思うほどに、『開文雑誌』に書く他に、『七一雑報』[63]「北斗新聞」などにも投稿が多い。「宗教の不自由ヲ政府ニ訝ルベカラザルノ説」（北斗1878.２.８）、「婦女子教化セザレバ真教モ達シ難キ説」（北斗1878.３.８）などがある。『七一雑報』では、「小児の教養スルハ母ニアリ」として、女子教育のために女學を盛んにする必要があること。そのためには善良の女教師が必要であると説いている。［東奥推奨論］『開文雑誌第三号』中では、弘前町の書店で、ギゾーの『文明史』の訳本を求めたが手に入れることが出来ずに東京の友人に頼んだことが記されていて、彼が新しい時代の知を求めていた姿を垣間見ることができる。

ところでこの『七一雑報』は、横浜港でバードを真っ先に出迎えたギューリックが刊行していた超宗派（無宗派）のキリスト教紙であった。彼女はこれについて、「政府の活動については、好ましくない批評を差し控え、ときとして抜け目なく賞賛しているので『出版物警告』からは逃れている。キリスト教の発展について論じたり、新たに信仰を誓った人にとって興味の持てるテーマを扱っている。元来のキリスト教徒の意見が不当に妨げられずに表現できれば、真に価値のある機関紙となるだろう。」と記している（バードⅡ p.173）。

この年の末にデビソンが弘前を離れ函館に向かうと、脇山夫妻もまた、１月３日に弘前を去り、函館に移った。1879年には、函館巡回地区担当者の中に脇山の名がみられる。この時もまた彼の名はMakiyama Gihoと間違えられているが脇山である。

脇山義保について記したものは少ないが、相澤は『津軽を拓いた人々』の［第65話］に脇山夫妻を取り上げているので参照されたい。相澤によると、函館に移った義保は、定住伝道者の資格を与えられ、1880年には函館教会の牧師に任命されたとある。その後、彼は渡米して神学校に留学した。一方つやは、その間（1885）に婦人伝道師となるために横浜の聖経女学校に入学、卒業後は留学から戻った義保と共に宇都宮で伝道に従事していた。義保は1891（明治24）年に亡くなった。義保については、1879年までは史料から彼の足跡を追い、その後は相澤によった。

（２）Yamada 山田源次郎・山田寅之助・山田きよ

1878年８月までの受洗者中Yamadaは、山田源次郎（1877.４.15、18歳７ヶ月）［以下（　）内は受洗年月日］、山田寅之助（1877.６.23、17歳）、山田きよ（子）（1878.10.６）の３人である。きよ

（子）は源次郎、寅之助、とく（高谷）の母である。娘のとくは母について次のように記している。「きよは歯を染めるのを先んじてこれを廃止し、世間注目を惹き『白歯の阿母さま』として、一時有名になった」[64] という、津軽に新しい文化を持ち込んだ婦人たちの中のひとりであった。

バードと会ったのは、当時19歳と18歳の青年であった源次郎か寅之助である。

兄の山田源次郎（写真５）から見てみると、「公開記事」に受洗後の彼の略名（山源）が講義者として見られる。この頃イングの書簡によると、源次郎らを伴い被差別部落で週一回の集会を開いており、学校設立も考えていた[65]。また、1878年の義塾蔵の日旺学校の記録によると、日旺学校の記者、校長補に彼の名前がある。校長の役目はまず、聖書の誦読をすることであったようである。源次郎も校長の欠席により代わりにその役を務めている。さらに、同年10月には、山鹿旗之進、本多斎らと共に勧士に挙げられている。

彼の名は、1881（明治14）年以降の黒石伝道に登場してくる。この年の「公会記事」に「本年九月ヨリ山田源次郎黒石ニ寄留し専ら同所伝道に尽力ス」とあり、翌1882年試用伝道者となった彼は美以（美）教会函館連会の任命により黒石担当となり、1883年まで黒石伝道に尽くした。

この後山田源次郎は小樽教会牧師、秋田楢山教会の初代牧師（1889-1891）となった。のちに彼は1892（明治25）年頃ユニテリアン派に転向し、メソジストの歴史から姿を消した[66]。

写真４：山鹿旗之進と山田寅之助（右）

（青山学院資料センター蔵）

写真５：山田源次郎

出典：『秋田楢山教会百年史』秋田楢山教会、p.21、1988年

弟の山田寅之助（1861―1928）（写真４右）は、1876（明治９）年に東奥義塾に入学した。この頃山鹿旗之進に勧められて、日旺学校に行ったようである[67]。翌年、西南の役（２.15－９.24）が起きると、巡査募集の呼びかけに応じ、塾長菊池九郎に率いられて、長谷川朝吉らと共に上京した。それに先立ち彼らはイングより受洗し、クリスチャンとなって西南の役鎮圧に向かったのだ。山鹿旗之進によると、西南の役が終り、弘前に戻った寅之助は、再び義塾に入学し、日旺学校で教え、また黒石に出張して伝道していたという[68]。1878年の「義塾一覧」には、彼の名が下等中学第３級に記載されており、バードの言うクリスチャンの学生には、確かに該当している。

1879（明治12）年に彼は横浜の美以教会神学校入学のため、弘前から東京まで30日かけて歩いて行った。カバンの色と同じくなるほど日焼けした顔になったと後に回想している。神学校卒業後、1889（明治22）年に彼は青山学院教授となり、『聖霊感化論』[69]、『基督伝』[70]、『耶蘇傳』[71] などを著し、明治期のキリスト教研究にその軌跡を残した。

源次郎の名が東奥義塾の名簿に見当たらないこともあり、山田寅之助がバードに会ったYamadaと推察される。

ただ疑問が残るのは、バードの記述である。［Yamadaは「人々はもはや神様について話を聞くことには関心がありません。」「それは私のせいです。」「私には力がありません。キリスト教が目新しかった頃は、何百人という人々が説教を聴きに来たのに、今ではたったの何十人しか集まりません」と言った。（本稿１章２）］と記され、Yamadaがこの地域での伝道に何らかの責任があることを示唆しているようである。これからは後に黒石の担当伝道者となった兄の源次郎がバードを訪ねた学生のうちのひとりともとれる。あるいはYamadaよりもむしろ当時担当伝道者となっていた脇山の声のようでもあり、山田の同定に疑問を残すが、Yamadaは山田兄弟のどちらかであることは確かである。

（３）Akama　アカマ

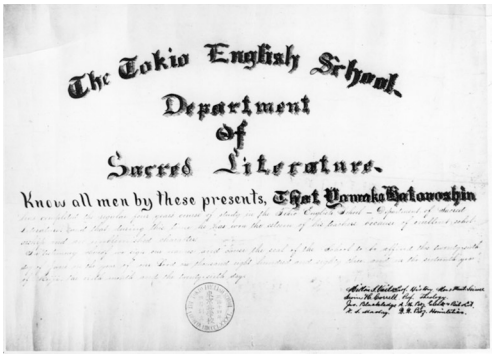
もうひとりのAkamaに該当する人物は弘前教会、東奥義塾の歴史に関する諸史料・資料のいずれでも見つからなかった。Akamaという名前ではなくそれと間違う名前の学生たちの誰かと考えるべきなのだろうか。

Akamaの手がかりは、バードの記した［彼は私をAkamaのとても感動的な熱のこもった講義を聴いている約100人の…］というところにあるだろう。彼は百人もの聴集を前にキリスト教の講義をしているのである。明らかに黒石で講義した学生のうちの誰かということになる。

もう一度黒石伝道を振り返ってみよう。黒石の伝道に名前が上がってくるのは、担当者の脇山と名前の出ている山田兄弟を除くと、５月３日の黒石最初の伝道に行った山鹿旗之進、田中五郎、古坂啓之助、本多斎、バードの来る直前７月22日に「山鹿元次郎黒石ニ行ク」と「公会記事」に記されている山鹿元次郎、他に黒石へ伝道に行ったと記している長谷川朝吉などである。彼らはいずれも義塾生で、表４［1877（明治10）年４月15日の受洗人、受洗希望者］に名前が上がっている。また本稿３章２にステューデント・ヘルパーとして、名前の上がっている面々である。彼らは受洗後間もないメンバーで、「當時學生信徒は、受洗せば必ず傳道せざるべからざりき」（本稿３章２資料⑤）を実行していた。

彼らのなかの誰かがバードに会ったとして、自分の名前を告げた際にAkamaと聞き間違えられる可能性のあるのはYamakaつまり山鹿である。山鹿旗之進は黒石の伝道以外にも本稿で再三登場した。もう一人の山鹿元次郎もまた山鹿素行を祖先とする山鹿家の別家を継いでいた。しかも７月22日には黒石に行ったことが記されている。青山学院には、Yamakaと書かれた山鹿旗之進の英学校の卒業証書（写真６）が残されていた。旗之進の履歴書には、「明治十年四月八日イングより受洗後直ちに弘前市内近郊○○町黒石等に伝道」とある。

写真６：山鹿旗之進の東京英学校卒業証書（1883）（青山学院資料センター蔵）



Yamakaと書かれている

（左図の名前部分の拡大）

またW・C・Davissonについては、義塾文書、公会記事ではデビソン、ダビソン、デビスンなどとカタカナ書きされているのに対して、旗之進のみは、「W.C.デヴィッドスン」とdを入れてカナ書きしているのも気になるところである。バードが初版の黒石のところで記したデビソンのスペルはDavidsonである（Bird p.377）。彼女がイングとデビソンの名を３人のクリスチャンの学生から聞いたとすると、dを入れて発音したのは誰かということになる。これらからAkama はYamakaと推察できるのではないかと筆者は推察している。しかしこれを確証するには至らなかった。

おわりに

イザベラ・バード（1831-1904）が東北の旅をした1878（明治11）年は、廃藩置県から数年の後、

日本が近代化へのシステム構築をしていたときである。旧体制に代わった維新政府は欧米のシステム導入による新体制を築きつつあった。彼女はそのことを理解していたにも関わらず、彼女のうちには矛盾が存在していた。「江戸は実際にはもう存在しない」（バードⅡ p.111）と言いながら彼女の手紙は「江戸 英国公使館にて」となっており、また、汽車に乗った彼女は「切符は東京行きではなく品川か新橋まで買う」と言いながら「江戸はどこにあるか」と尋ねている（バードⅠ p.38）。このように、彼女の記述には、江戸と東京が混在しているが、これは、彼女のと言うより時代がまさにそのようであった。人びとは新旧の矛盾と混乱の中にいたのだ。このような状況のなかで、彼女は古い日本を求めて蝦夷を目指すのだが、彼女の目指した古い日本は、むしろその途上の東北の旅にあったといってもいいだろう。無知と不衛生の中にいた人々の姿は彼女が知りたかった古い日本であった。しかし、その一方に明治政府による郵便、学校、警察といった新システムの導入は、本州の果ての村々にも浸透しつつあった。

彼女が東北の旅で出会ったのは、一方では古い日本を体現するような彼女を覗きにくる多くの群集であり、他方新しい日本を体現する戸長、医師、警官などの新システムの実行者であった。後者の多くは、役職として彼女に接したと考えられるが、同時に珍しい外国夫人を覗きたい気持ちを隠してはいない。しかし、彼女が黒石で出会った３人の青年たちは、古いままでいる日本人でもなければ、新体制に組み込まれていく日本人でもないと考えられる。日本における宣教が緒について間もない時期の学生信徒であった３人のステューデント・ヘルパーとの出会いは、彼女の「日本の奥地」理解にどんな影響を与えたのだろうか。

彼ら３人は片言（imperfect）の英語であっても通訳の伊藤というノイズ無しで彼女とじかに言葉を交わした日本人である。このことは、彼女にとって大きな意味を持つ。彼らは伝道の悩みを彼女に訴え、彼女はその悩みをやがて自己の悩みに置き換えていったと考えられる[72)]。

３人の学生たちにとって、彼女は初めて見た西洋の婦人というわけではない。彼らはイング、デビソン両宣教師夫人の近くにいた人々であり、彼女を珍しさの対象として見物した多くの村々の群集とは異なっていた。彼らにとってのバードは、彼らの母の世代に属し、一人で世界を旅する女性という点で、夫と共に宣教に従事する夫人たちとは違っていた。彼らについてバードが記した言葉は少なく、またこの出会いを記した彼らの文書の発見もないので、どのような言葉を交わし、その後どのような影響があったかを知るのは難しい。しかしこの出会いがバードと学生たちの双方に何の影響も与えなかったと言うことは出来ないだろう。この翌年、山田（寅）、山鹿（旗）は「七一雑報」で知った横浜神学校へ入学し、またその後山鹿、脇山は留学して、いずれも伝道と教育に従事した。

バードにとって、黒石での３人の学生信徒との出会いは、彼女の東北の旅が古い日本の発見、新体制の建物見学のみならずその時代に生きた人びとの出会いであった。また学生たちにとって、バードは西欧からやって来たキリスト教文化の体現者であったと考えられる。

［謝辞］

本論文を進めるにあたり弘前大学大学院地域社会研究科齋藤捷一教授にご指導をいただきましたことに感謝致します。

また本論文の調査にあたり、東奥義塾、青山学院資料センターには史料・文献の利用のみならずご教示、ご協力をいただきましたことに深く感謝申し上げます。日本基督教団藤崎教会 福島隆助牧師、青森教会藤田牧師には、資料提供と共にキリスト教および教会についてご教示をいただきました。また明の星短期大学図書館の利用をお許しいただき、キリスト教関係資料を利用させていただきましたことに感謝致します。

引用文献

１）編集責任者小館衷三『黒石市史』通史編Ⅱ、通史編Ⅱ、pp.31-32、1988年。

２）武藤信義「書評と紹介イザベラ・L・バード著・高梨健吉訳「日本奥地紀行」（東洋文庫240）平凡社」『栃木史心会報』７号1983年、長谷川誠一「二つの英国人蝦夷旅行日記、Thomas W・Blakiston Isabella・L・Bird」『酪農学園紀要』、第10巻1984年、金坂清則「J・ビショップ夫人の揚子江流域紀行」大阪大学教養部研究集録、楠家重敏『日本アジア協会の研究』、日本図書刊行会、1997年。

３）高畑美代子・齋藤捷一「イザベラ・バードの描いた碇ヶ関と子どもと遊び」『弘前大学大学院地域社会研究科年報』第１号〔2004〕、pp.130-132、弘前大学地域社会研究科、2005年。

４）Bird,L.Isabella（1880）*Unbeaten Tracks in Japan*（Ⅰ）、Ganesha Publishing Ltd.&Tokyo：Edition Synapse、p.196、1997年。

５）文献４、p.23。

６）Janes,Leroy Lanshing（1837-1909）1871-1876（明治４-９）年まで熊本洋学校教師・校長。
ジェーンズと熊本バンドについてはフレッド・G.ノートヘルファー、飛鳥井雅道訳『アメリカのサムライ』法政大学出版局1991年。（Fred G. Notehelfer *'AMERICAN SAMURAI, Captain L.L. Janes and Japan'* Princeton University Press,1985年）法政大学出版局1991年。

７）本稿１章２黒石削除部分訳（文献４、p.377）。

８）相澤文蔵『津軽を拓いた人々』弘前学院、pp.99,131、2003年,海老沢亮『日本キリスト教百年史』、日本基督教団、p.89、1959年に弘前バンドについての記述がある。

９）植村正久（1858-1925）1887年東京一番町に一致教会（現・日本基督教団富士見教会）設立、明治学院教援、1904年東京神学社を創立、校長。
押川方義（1850-1928）1886年W.E.ホーイと共に仙台神学校（東北学院）創立、初代院長。
井深梶之助（1854-1941）1891年明治学院第２代総理、東京麹町教会牧師。
本多庸一（1848-1912）東奥義塾塾長、青山学院第二代院長（日本人として初）、日本基督教会同盟会長（1911）。

10）楠家重敏、橋本かほる、宮崎路子『バード 日本紀行』雄松堂出版、pp.183-195、2000年。

11）新島襄が同志社設立に臨んで広く教育を考えたのに対して、アメリカンボードの宣教師たちは、伝道師育成を考えていた。しかし時の京都府知事の反対で聖書を教えないことになった。

12）フェリス（Dr.Ferris）は「神はわれわれ宣教師を学校へ導かれたので、神の王国は学校をとおして日本に入ってきたのである」といっている。（ユージン・ストック、吉田弘・柳田裕訳『英国伝道教会の歴史』聖公会出版、p.17、2003年）。
幾つか例を挙げると、1878年までに、同志社（1875）―アメリカン・ボード（新島襄,Davis,J.D.）、立教大学（1874）―聖公会（Williams,BishopC.）、フエリス女学院（1870）（Kidder,Mary E.）、梅花女学校耕教学舎（1878）、などのちの大学の基礎ができていた。1880年に築地大学校（明治学院）―福音派（Hepburn,Dr.J.C（ヘボン））、青山学院（1882）―メソジスト（Macly、本多庸一）プロテスタント系の学校。後にカトリックでは上智が挙げられる。女子を対象とした、函館遺愛（1882）、弘前女学院（弘前学院）（1886）などはまだバードの来た頃は始まっていなかった。多くの女子教育を目的としたキリスト教主義の学校が創設されるのは、明治10年代後半になってからである。

13）東奥義塾『写真で見る東奥義塾120年』東奥義塾、p.24、1992年。

14）Davisson,W.C.*'60th annual Report of the Missionary Society of the Methodist Episcopal Church for the year of 1878', Missionary Report,* the Methodist Episcopal Church、pp.149-151、1878年、青山学院蔵。

15）「東奥義塾一覧」1878年、東奥義塾蔵。

16）青山学院編集『本多庸一』青山学院、p.62、1968年。

17）外部からの抗議により、菊池九郎が家屋を本多に提供した事に関してイングの1877年「ミッショナリー・リポート」（青森県史編さん近現代部会編集『青森県史』資料編近現代Ⅰ、pp.753-754、758-757、2002年、青山学院蔵。）に報告がある。

18）本多繁「公会記事」、青山学院蔵、原典は日本基督教団弘前教会蔵。

19）西南戦争の征討軍、新撰旅団編成のための徴募士族数では、青森県が2,581人と最も多く、次いで宮城県が1,358人である。内閣文庫蔵「岩倉文書」40（新撰旅団編成書類）、福島県警察史編さん委員会『福島県警察史』福島県警察本部、p.541、1980年。

20）相澤によると19名（職員２、教師５、生徒９、塾友２、小使１）が出征したとある。22名との誤差は、このうち学生で教師であったもの３名の重複によると思われる（文献８［相澤］、p.132）。

21）Ing, John *'59th annual Report of the Missionary Society of the Methodist Episcopal Church for the year of 1877', Missionary Report,* the Methodist Episcopal Church、1878年、青山学院蔵。

22）文献14。

23）山鹿旗之進手書文書（口述）、青山学院蔵。

24）高木武夫編集『日本メソジスト弘前教会五十年記念史』日本メソジスト弘前教会、p.８、1925年。

25）公会記事による数。デビソンのミッショナリー・リポート（文献14）では、弘前３、青森３、黒石１と報告さ

れている。

26）弘前教会・東奥義塾の研究はそれぞれの分野で進んでおり、教会・義塾の年代ごとに編纂され50年、100年史や相澤・山本（博）を始めとする研究者の研究成果にこの間の事情が詳しい。

27）菊池九郎（1847-1926）東奥義塾創立者。

28）吉川泰次郎（1849-1895）東奥義塾初代塾長、のち文部省を経て日本郵船社長。

29）兼松成言（1818-1877）儒学者、蘭学も学び藩校稽古館の督学。

30）文献24、p.５。

31）この伝道日記については本多庸一（青山学院編『本多庸一』青山学院、1968）とするものと聖書販売人であった弟の斎（文献８〔相澤〕）とするものがある。『120年のあゆみ　弘前教会』（日本基督教団基督教会、1995）は後者としている。

32）インディアナ州アスベリー大学（のちディボー大学）。菊池、須藤は現地にて病死、川村は明治15年に帰国１週間後没。珍田は東奥義塾教師のち1885（明治18）から外務省勤務、ロシア全権公使、駐米全権公使などを歴任、1927（昭和２）年から侍従長。伯爵。佐藤は1905（明治38）年の日露講和会議（ポーツマス会議に全権団の一員、駐米全権公使。

33）バードは「新潟伝道に関する覚書」でバーム医師がCMSから派遣されたと書いている。（文献10、p.47）

34）当時義塾生であった山田寅之助は、この時の様子を、「ハリス夫人は非常に若く、容貌も美しかった。余の驚いたのは日本語の巧みなことであった。ハリス夫人はある時、婦人の集会を開いた。余は子供であった為にその席にのぞむことができた。余は子供ながら深く其説教に感激した。」（「懐古」『護教』1907.９.７.）と述べている。この一文は貴重な証言である。宣教師夫人の説教があり、特に女性や子供のために集会が開かれていたことが記されている。若くて美しい外国人女性見たさがあったとしても、女性と子供のための集会が開かれ関心を集めたことは、男性信者が中心であったこの地の伝道の将来に女性が参加してくるきっかけとなったことは否めない。同年表１義塾の項に同人が日旺学校に通いはじめた頃の懐古を載せたが、このとき、女性の数は、２,３の老婦人と若き女性と記されている。1877年のイングのミッショナリー・リポートには「both sexes being well represented（男女のバランスがよい）」と報告されており、徐々に女性信徒が増加していたと考えられる。しかし、現実にはこの報告の翌年バードが来た1878年夏には女性受洗者は、わずか３名にすぎなかった。とはいえ、この頃が女性信徒増加の転換点であり、この秋４名の女性受洗者を出し、さらに翌年には男性を上回る女性信徒が生まれたことを考えると女性や子供に対する伝道にハリス夫人のような女性伝道師の影響があったと考えるべきだろう。

35）大木英二『弘前教会百年小史ニュース』日本基督教団弘前教会２号３号1975年、文献８〔相澤〕、pp.120-128。

36）文献８〔相澤〕、p.156。

37）文献８〔相澤〕、p.106。

38）山鹿旗之進原稿（口述ペン書き）青山学院蔵。

39）1831年に英国バラブリッジの牧師の長女として生まれた。

40）弘前バンド最初の14人の中のひとり。

41）本多斎（1851-1945）本多庸一の弟、聖書販売人、牧師として日本各地および朝鮮で伝道。

42）古坂啓之助（1859-1935）1876年受洗。のち牧師となり1892（明治25）年以降九州で伝道。

43）山鹿旗之進（1860-1954）先祖に山鹿素行、1877年受洗、横浜山手神学校、アメリカのドルー神学校卒。東京英和学校教師。名古屋清流女学校設立。名古屋教会、横浜教会、神奈川教会、九段教会等に勤務、1907年メソジスト教会第一総会代議員。1914年横浜聖経女学校教師。

44）弘前教会百年史編さん委員会『弘前教会百年史年表』日本基督教団弘前教会p.５、1975年。
文献35［大木］。

45）メソジスト教会における牧師の補助者で信者の中から、行状その他の試験により任命され、１年限りで更新される。巡回制度のために不在がちな牧師の補助者として礼典を除く集会の指導をする権限を認められている職制。何年か努め上げた者は、その上の定住伝道者に引き上げられ、一定の年限を務め上げると牧師に任命される道も開かれていた。

46）本稿１章２黒石の削除部分訳（文献４、p.378）。

47）また鐵太郎の家は盲目の伝道者と知られる藤田匡（ただす）が黒石で定住伝道した際の下宿先でもあった。このことについては、鐵太郎の５男で詩人の鳴海要吉（1883〔明治16〕生れ）が島崎藤村『若菜集以前』（日本書荘、1937）の「編者の言葉」の中で記している。
明治11年には、鐵太郎の長男である慶太郎が跡を継いでいた。慶太郎はクリスチャンであった。

48）青森県郷土作家研究会編『郷土作家研究』第１号、青森県郷土作家研究会、p.１、1989年。相馬正一氏が引用している鳴海要吉書簡は昭和26年以降すべて相馬氏宛てである。

49）現在の横町２番地には、スミトモ靴・鞄店があるが間口12間の大きな商店である。
資料中他に、黒石で弘前教会と関わりのある場所は、1884（明治17）年第２季会が開かれたとされる横町加藤宅がある（『120年のあゆみ日本基督教団弘前教会』日本基督教団弘前教会、p.106、1995年）。

50）同様の記述は『弘前教会五十年記念史』（文献24、p.54）の人名編「フースフー」にもある。

51）相澤によると、この日曜日の午後の農村伝道が途絶えたのは、天皇の東北巡幸の際に披露した成績発表の準備に全力を集中したためであるという（文献８［相澤］、p.113）。
52）「山田寅之助君」『青山学院五十年史』青山学院、p.405、1932年。
53）「思出の記」文献24、p.283。
54）文献10、pp.189, 277。
55）本稿１章２黒石の削除部分訳。
56）「元岩手県下遠野住当時東京府下平民青森県弘前寄留」（1877年受洗時、「公会記事」）「東京府民在弘前」『七一雑報』の本人投稿）から脇山は東京府民として、弘前に来ていたことが分かる。
57）脇山義保編集『開文雑誌』第３号、p.５、1879年。
58）青森県警察史編纂委員会『青森警察史』青森県警察本部、上巻、p.1180、1973年。「五所川原警察署長」名簿で所長となっているのは脇山のみで、以後は制度の変更により署長となっている。
59）『青森県警察史』（同上）によると、脇山義保の後任署長として鹿児島出身の川島信行の名があるが、その就任時期も空欄になっている。『弘前教会五十年記念史』（文献24）の脇山の妻つやの欄を見ると、明治８年に結婚、その時、義保は弘前に警部を奉職せしと記されている。
60）山鹿旗之進原稿、青山学院蔵。
61）東奥義塾百年史編纂委員会、代表　山本博『開学百年記念東奥義塾年表』東奥義塾、p58、1972年。
62）北斗新聞社：明治10年創刊11年廃刊　本局　青森。廃刊後東奥義塾が青森新聞として継続した。
63）『七一雑報』1878.２.８、３.20、７.26、『北斗新聞』1878.６.15など。
64）「婦人たちの面影」文献24、p.280。高谷とく（1876-1930）：弘前女学校（現弘前学院大学、聖愛高校）教師、明治30年代弘前矯風会長など。
65）文献24、p.304。
66）『日本基督教団秋田楢山教会百年史』秋田楢山教会、p.21、1988年。
67）山田寅之助「過去帖」『護教』1907.９.７。
68）山鹿旗之進「山田寅之助君」『青山学院五十年史』青山学院、p.405、1932年。
69）『聖霊感化論』美以雑書会社、1888年。
70）『基督伝』警醒社書店、1924年。
71）『耶蘇伝』警醒社、1938年。
72）文献10、p.281、（文献４、p.328）。